

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

青空文庫

一 午後の授業

「ではみなさんは、そういうふう川だと言われたり、乳ちちの流ながれたあとだと言われたりしていた、このぼんやりと白いものがほんとうは何かご承しょうち知ちですか」先生は、黒板こくばんにつ
 した大きな黒い星座せいざの図の、上から下へ白くけぶった銀河帯ぎんがたいのようなところを指さしな
 がら、みんなに問といをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四、五人手をあげました。ジヨバンニも手を
 あげようとして、急いそいでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌ざっし
 で読んだのですが、このごろはジヨバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を讀むひま
 も讀む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという氣持きもちちがするのです。
 ところが先生は早くもそれを見つけたのでした。

「ジヨバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか」

ジヨバンニは勢いきおいよく立ちあがりましたが、立ってみるともうはつきりとそれを答える
 ことができないのでした。ザネリが前の席せきからふりかえって、ジヨバンニを見てくすつと

わらいました。ジヨバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になってしまいました。先生がまた言いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河はだいたい何でしょう」

やつぱり星だとジヨバンニは思いましたが、こんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困ったようでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん」と名指しました。

するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上がったままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじつとカムパネルラを見ていましたが、急いで、

「では、よし」と言いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きな望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジヨバンニさんそうでしょう」

ジヨバンニはまっ赤になつてうなずきました。けれどもいつかジヨバンニの眼のなかには涙がいつぱいになりました。そうだ僕は知っていたのだ、もちろんカムパネルラも知っ

ている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士はかせのうちでカムパネルラといっしょに読んだ雑誌ざっしのなかにあったのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌ざっしを読むと、すぐお父さんの書齋しよさいから巨きな本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まつ黒な頁ページいっばいに白に点々てんでんのある美しい写真しゃしんを二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れるはずもなかったのに、すぐに返事へんじをしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午後にも仕事しごとがたらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を言わないようになったので、カムパネルラがそれを知ってきのどくがつてわざと返事へんじをしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのです。

先生はまた言いました。

「ですからもしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂すなや砂利じやりの粒つぶにもあたるわけです。またこれを巨きな乳ちちの流れながと考えるなら、もつと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳ちちのなかにまるで細かこまにうかんでいる脂油あぶらの球たまにもあたるのです。そんなら何なにがその川の水にあたるかと言いいますと、それは真空しんくうという光ひかりがある速はやさで伝つたえるもので、太陽たいようや地球ちきゅうもやつぱりその

なかに浮かんでいっているのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲んでいっているわけです。そしてその天の川の水のなから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集まって見え、したがって白くぼんやり見えるのです。この模型をごらん下さい」

先生は中にたくさん光る砂のつぶのはいった大きな両面の凸レンズを指しました。「天の川の形はちようどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレンズの中を見まわすとしてごらん下さい。こつちの方はレンズが薄いのでわずかの光る粒すなわち星しか見えないでしょう。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒すなわち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるという、これがつまり今日の銀河の説なのです。そんならこのレンズの大きさがどれくらいあるか、またその中のさまざまの星についてはもう時間ですから、この次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭りなのですから、みなさんは外へでてよくそらをごらん下さい。ではここまでです。本やノートをおしまい下さい」

そして教室じゆうはしばらく机の蓋をあけたりしめたり本を重ねたりする音がいつぱいでしたが、まもなくみんなはきちんと立つて礼をすると教室を出ました。

二 活版所

ジヨバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七、八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中にして校庭の隅の桜の木のところを集まっています。それはこんやの星祭りに青いあかりをこしらえて川へ流す鳥瓜を取りに行く相談らしかったです。

けれどもジヨバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたり、ひのきの枝にあかりをつけたり、いろいろしたくをしているのでした。

家へは帰らずジヨバンニが町を三つ曲がつてある大きな活版所にはいつて靴をぬいで上がりますと、突き当たりの大きな扉をあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついて、たくさんの輪転機がばたりばたりとまわり、きれで頭をしばったりラムプシェードをかいたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いておりまし

た。

ジヨバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子テーブルにすわった人の所ところへ行っておじぎをししました。その人はしばらく棚たなをさがしてから、

「これだけ拾ひろって行けるかね」と言いながら、一枚の紙切れを渡わたしました。ジヨバンニはその人の卓子テーブルの足もとから一つの小さな平ひらたい函はこをとりだして向むこうの電燈でんとうのたくさんついた、たてかけてある壁かべの隅すみの所ところへしやがみ込こむと、小さなピンセットでまるで粟あわ粒つぶぐらいの活字かつじを次つぎから次つぎへと拾ひろいはじめました。青い胸むねあてをした人がジヨバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君くん、お早はやう」と言いいますと、近くちかくの四、五人の人たちが声もたてずこつちも向むかずむに冷つめたくわらいました。

ジヨバンニは何べんも眼めをぬぐいながら活字かつじをだんだんひろいました。

六時はちがうってしばらくたつたころ、ジヨバンニは拾ひろった活字かつじをいっぱいに入いれた平ひらたい箱はこをもういちど手てにもつた紙かみきれと引き合あわせてから、さっきの卓子テーブルの人へ持もって来きました。その人は黙だまってそれを受け取う取とってかすかにうなずきました。

ジヨバンニはおじぎをすると扉とびらをあけて計算台けいさんだいのところところに来きました。すると白服しろふくを着き

た人がやつぱりだまって小さな銀貨ぎんかを一つジョバンニに渡わたしました。ジョバンニはにわか
に顔いろがよくなつて威勢いせいよくおじぎをすると、台の下に置おいた靴かばんをもつておもてへ飛と
だしました。それから元氣よく口笛くちぶえを吹ふきながらパン屋やへ寄よつてパンの塊かたまりを一つと角かくざ
砂糖とうを一袋ふくろ買かいますといちもくさんに走りだしました。

三 家

ジョバンニが勢いきおいよく帰かへつて来たのは、ある裏町うらまちの小さな家でした。その三つならん
だ入口のいちばん左ひだりがわ側がわには空箱あきばこに紫いろのケールやアスパラガスが植うえてあつて小
さな二つの窓まどには日覆ひおほいがありたままになっていました。

「お母さん、いま帰かへつたよ。ぐあい悪わるくなかつたの」ジョバンニは靴くつをぬぎながら言いいま
した。

「ああ、ジョバンニ、お仕事しごとがひどかつたろう。今日は涼すずしくてね。わたしはずうつとぐ
あいがいいよ」

ジョバンニは玄関げんかんを上あがつて行いきますとジョバンニのお母さんがすぐ入口へやの室むろに白しろ

巾をかぶつて寝んでいたのでした。ジヨバンニは窓をあけました。

「お母さん、今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思って」

「ああ、お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから」

「お母さん。姉さんはいつ帰ったの」

「ああ、三時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね」

「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか」

「来なかつたらうかねえ」

「ぼく行つてとつて来よう」

「ああ、あたしはゆつくりでいいんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ」

「ではぼくたべよう」

ジヨバンニは窓のところからトマトの皿をとつてパンといっしょにしばらくむしやむしやたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつとまもなく帰ってくると思うよ」

「ああ、あたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの」

「だって今朝けさの新聞に今年けさは北りょうの方りょうの漁りょうはたいへんよかったと書いてあったよ」

「あただけどねえ、お父ちちさんは漁りょうへ出ていないかもしれない」

「きつと出ているよ。お父ちちさんが監獄かんごくへはいるようなそんな悪いわることをしたはずがないんだ。この前まえお父ちちさんが持つてきて学校がっこうへ寄贈きぞうした巨おおきな蟹かにの甲こうらだのとなかいの角つのだの今いまだつてみんな標本ひょうほん室しつにあるんだ。六年生じゅうねんせいなんか授業じゅぎょうのとき先生せんせいがかわるがわる教室けうしつへ持つて行くよ」

「お父ちちさんはこの次つぎはおまえにラッコの上着うわぎをもつてくるといったねえ」

「みんながぼくにあうとそれを言うよ。ひやかすように言うんだ」

「おまえに悪わる口くちを言うの」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して言いわない。カムパネルラはみんながそんなことを言いうときはきのどくそうにしているよ」

「カムパネルラのお父ちちさんとうちのお父ちちさんとは、ちょうどおまえたちのように小さいときからのお友とも達たちだつたそうだよ」

「ああだからお父ちちさんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行いったよ。あのころはよかつたなあ。ぼくは学校がっこうから帰かへる途とちゆう中ちゆうたびたびカムパネルラのうちに寄よつた。カム

パネルラのうちにはアルコーランプで走る汽車があったんだ。レールを七つ組み合わせるとまるくなつてそれに電柱でんちゆうや信号標しんごうひょうもついていて信号標しんごうひょうのあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなつたとき石油せきゆをつかつたら、缶かんがすつかりすすけたよ」

「そうかねえ」

「いまも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家じゆうまだしいんとしているからな」

「早いからねえ」

「ザウエルという犬がいるよ。しつぽがまるで箒ほうきのようだ。ぼくが行くと鼻はなを鳴らしてついてくるよ。ずうつと町の角かどまでついてくる。もつとついてくることもあるよ。今夜はみんなで鳥からすうり 瓜うりのあかりを川へながしに行くんだって。きっと犬もついて行くよ」

「そうだ。今晚こんばんは銀河ぎんがのお祭りまつだねえ」

「うん。ぼく牛乳ぎゆうにゆうをとりながら見てくるよ」

「ああ行つておいで。川へははいらないでね」

「ああぼく岸きしから見るだけなんだ。一時間で行つてくるよ」

「もつと遊あそんでおいで。カムパネルラさんといっしよなら心しんぱい配はいはないから」

「ああきつといっしよだよ。お母さん、窓をしめておこうか」

「ああ、どうか。もう涼すずしいからね」

ジヨバンニは立つて窓まどをしめ、お皿さいらやパンの袋ふくろをかたづけけると勢いきおいよく靴くつをはいて、
「では一時間半はんで帰かえってくるよ」と言いながら暗くらい戸口とぐちを出でました。

四 ケンタウル祭さいの夜

ジヨバンニは、口笛くちぶえを吹ふいているようなさびしい口つきで、檜ひのきのまつ黒くろにならんだ町まちの坂さかをおりて来たのでした。

坂さかの下したに大きな一つの街燈がいとうが、青白あざわかしやく立派りっぱに光あかりつて立たっていました。ジヨバンニが、
どンドン電燈でんとうの方ほうへおりて行いきますと、いままでばけもののように、長くぼんやり、うしろへ引ひいていたジヨバンニの影かげほうしは、だんだん濃こく黒くろはつきりなつて、足をあげたり手を振ふったり、ジヨバンニの横よこの方ほうへまわつて来るのでした。

(ぼくは立派りっぱな機関車きかんしゃだ。ここは勾配こうばいだから速はやいぞ。ぼくはいまその電燈でんとうを通り越こ

す。そうら、こんどはぼくの影法師はコンパスだ。あんなにくるつとまわって、前の方へ来た)

とジヨバンニが思いながら、大股にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりひるまのザネリが、新しいえりのとがったシャツを着て、電燈の向こう側の暗い小路から出て来て、ひらつとジヨバンニとすれちがいました。

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの」ジヨバンニがまだそう言ってしまったといううちに、

「ジヨバンニ、お父さんから、ラッコの上着が来るよ」その子が投げつけるようにうしろから叫びました。

ジヨバンニは、ぼつと胸がつめたくなり、そこらじゅうきいと鳴るように思いました。「なんだい、ザネリ」とジヨバンニは高く叫び返しましたが、もうザネリは向こうのひばの植わった家の中へは行っていました。

(ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを言うのだろう。走るときはまるで鼠のようなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを言うのはザネリがばかなからだ)

ジヨバンニは、せわしくいろいろのことを考えながら、さまざまの灯や木の枝で、すつ

かりきれいに飾られた街を通って行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がついて、一秒ごとに石でこきえたふくろうの赤い眼が、くるつくるつとうごいたり、いろいろな宝石が海のような色をした厚い硝子の盤に載って、星のようにゆつくり循環したり、また向こう側から、銅の人馬がゆつくりこつちへまわって来たりするのです。そのまん中にまいる黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾ってありました。

ジヨバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

それはひる学校で見たあの図よりはずうつと小さかったのですが、その日と時間に合わせて盤をまわすと、そのとき出ているそらがそのまま楕円形のなかにめぐってあらわれるようになっており、やはりそのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむつたような帯になって、その下の方ではかすかに爆発して湯げでもあげているように見えるのでした。またそのうしろには三本の脚のついた小さな望遠鏡が黄いろに光って立っていましたし、いちばんうしろの壁には空じゅうの星座をふしぎな獣や蛇や魚や瓶の形に書いた大きな図がかかっていました。ほんとうにこんなような蠍だの勇士だのそらにぎつりいるだろうか、ああぼくはその中をどこまでも歩いてみたいと思ったりしてしばらくぼんやり立っていました。

それからにわかにお母さんの牛乳のことを思いだしてジヨバンニはその店をはなれました。

そしてきゆうくつな上着の肩を気にしながら、それでもわざと胸を張って大きく手を振って町を通って行きました。

空気は澄みきって、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街燈はみなまっ青なもみや櫛の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタナスの木などは、中にたくさんまめでんとうの豆電燈がついて、ほんとうにそこらは人魚の都のように見えるのでした。子どもらは、みんな新しい折のついた着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、

「ケンタウルス、露をふらせ」と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしそうに遊んでいるのでした。けれどもジヨバンニは、いつかまた深く首をたれて、そこらのにぎやかさとはまるでちがったことを考えながら、牛乳屋の方へ急ぐのでした。

ジヨバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾本も幾本も、高く星ぞらに浮かんでいるところに来ていました。その牛乳屋の黒い門をはいり、牛のおいのするうすくらいだいどころ台所の前に立って、ジヨバンニは帽子をぬいで、

「今晚は」と言いましたら、家の中はしいんとして誰もいたようではありませんでした。今晚は、ごめんなさい」ジヨバンニはまっすぐに立つてまた叫びました。するとしばらくたつてから、年とつた女の人が、どこかぐあいが悪いようにそろそろと出て来て、何か用かと口の中で言いました。

「あの、今日、牛乳が僕んとこへ来なかつたので、もらいにあがつたんです」ジヨバンニが一生けん命勢いよく言いました。

「いま誰もいないでわかりません。あしたにしてください」その人は赤い眼の下のところをこすりながら、ジヨバンニを見おろして言いました。

「おつかさんが病氣なんですから今晚でないと困るんです」

「ではもう少したつてから来てください」その人はもう行ってしまひそうでした。

「そうですか。ではありがとうございます」ジヨバンニは、お辞儀をして台所から出ました。

十字になつた町のかどを、まがろうとしましたら、向こうの橋へ行く方の雑貨店の前で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、六、七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑つたりして、めいめい烏瓜の燈火を持ってやって来るのを見ました。その笑い声も口笛も、みんな聞きおぼえのあるものでした。ジヨバンニの同級の子供らだったの

です。ジヨバンニは思わずどきつとして戻ろうとしましたが、思い直して、いつそう勢よくそつちへ歩いて行きました。

「川へ行くの」ジヨバンニが言おうとして、少しのどがつまったように思ったとき、

「ジヨバンニ、ラツコの上着が来るよ」さっきのザネリがまた叫びました。

「ジヨバンニ、ラツコの上着が来るよ」すぐみんなが、続いて叫びました。ジヨバンニはまっ赤になって、もう歩いているかもわからず、急いで行きすぎようとしたら、そのなかにカムパネルラがいたのです。カムパネルラはきのどくそうに、だまって少しわらつて、おこらないだろうかというようにジヨバンニの方を見ていました。

ジヨバンニは、にげるようにその眼を避け、そしてカムパネルラのせいの高いかたちが過ぎて行つてまもなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲がるとき、ふりかえつて見ましたら、ザネリがやはりふりかえつて見ていました。そしてカムパネルラもまた、高く口笛を吹いて向こうにぼんやり見える橋の方へ歩いて行つてしまつたのでした。ジヨバンニは、なんとも言えずさびしくなつて、いきなり走りだしました。すると耳に手をあてて、わあわあと言いながら片足でぴよんぴよん跳んでいた小さな子供らは、ジヨバンニがおもしろくてかけるのだと思つて、わあいと叫びました。

まもなくジヨバンニは走りだして黒い丘の方へ急ぎました。

五 天気輪の柱

牧場ぼくじょうのうしろはゆるい丘おかになって、その黒い平らな頂ちようじょう上しょうは、北の大熊星おおくまぼしの下したに、ぼんやりふだんよりも低くひくく、連なつて見えました。

ジヨバンニは、もう露つゆの降りおかかった小さな林のこみちを、どんどのぼって行きました。まつくらな草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、その小さなみちが、一すじ白く星あかりに照らてしだされてあつたのです。草の中には、ぴかぴか青びかりを出す小さな虫もいて、ある葉はは青くすかし出され、ジヨバンニは、さつきみんなの持もつて行つた鳥からすうり瓜うりのあかりのようだとも思いました。

そのまつ黒な、松まつや檜ひのきの林を越こえると、にわかにならんと空がひらけて、天の川がしらと南から北へ互むたつているのが見え、また頂いただきの、天気輪てんきりんの柱はしらも見わけられたのでした。つりがねそうか野のぎくかの花が、そこらいちめん、夢ゆめの中からもかおりだしたというように咲さき、鳥が一疋びき、丘おかの上を鳴き続けながら通つて行きました。

ジヨバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どこどかするからだを、つめたい草に投げました。

町の灯は、暗の中をまるで海の底のお宮のけしきのようにともり、子供らの歌う声や口笛、きれぎれの叫び声もかすかに聞こえて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草も少しずつ、ジヨバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷やされました。

野原から汽車の音が聞こえてきました。その小さな列車の窓は、一列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、苹果をむいたり、わらったり、いろいろなふうにしていて、と考えると、ジヨバンニは、もうなんとも言えずかなしくなっていて、また眼をそらに挙げました。

(この間原稿五枚分なし)

ところがいくら見ている、そのそらは、ひる先生の言ったような、がらんとした冷たいところだとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やらある野原のように考えられてしかたなかつたのです。そしてジヨバンニは青い琴の星が、三つにも四つにもなっていて、ちらちらまたたき、脚が何べんも出たり引つ込んだりして、とうとう藪のように長く延びるのを見ました。またすぐ眼の下のまぢまでが、

やっぱりぼんやりしたたくさんの星の集まりか一つの大きなけむりかのように見えるように思いました。

六 銀河ステーション

そしてジヨバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になつて、しばらく螢のように、ペかペか消えたりともつたりしているのを見ました。それはだんだんはつきりして、とうとうりんとうごかないようになり、濃い鋼青のそのの野原にたちました。いま新しく灼いたばかりの青い鋼の板のような、そのの野原に、まっすぐにすきつと立つたのです。

するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと言う声がしたと思うと、いきなり眼の前が、ぱつと明るくなつて、まるで億万の螢鳥賊の火を一ぺんに化石させて、そらじゆうに沈めたというぐあい、またダイヤモンド会社で、ねだんがやすくならないために、わざと穫れないふりをして、かくしておいた金剛石を、誰かがいきなりひつくりかえして、ばらまいたというふうに、眼の前がさあつと明るくなつて、

ジヨバンニは、思わず何べんも眼をこすってしまいました。

気がついてみると、さつきから、ごとごとごとごと、ジヨバンニの乗っている小さな列車つしやが走りつづけていたのです。ほんとうにジヨバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈でんとうのならんだ車室に、窓から外を見ながらすわっていたのです。車室の中は、青い天鵞絨ビロードを張った腰掛けこしかが、まるでがらあきで、向こうの鼠いろのワニスを塗った壁かべには、真鍮しんちゆうの大きなぼたんが二つ光っているのです。

すぐ前の席せきに、ぬれたようにまつ黒な上着うわぎを着た、せいの高い子供こどもが、窓から頭を出して外を見ているのに気がつきました。そしてそのこどもの肩かたのあたりが、どうも見たことのあるような気がして、そう思うと、もうどうしても誰だれだかわかりたくて、たまらなくなりました。いきなりこつちも窓まじから顔を出そうとしたとき、にわかこどもにその子供が頭を引つ込めて、こつちを見ました。

それはカムパネルラだったのです。ジヨバンニが、

カムパネルラ、きみは前からここにいたの、と言おうと思ったとき、カムパネルラが、「みんなはね、ずいぶん走ったけれども遅おくれてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追おいつかなかった」と言いいました。

ジヨバンニは、

(そうだ、ぼくたちはいま、いつしよにきそつて出かけたのだ)とおもいながら、

「どこかで待つていようか」と言いました。するとカムパネルラは、

「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎いにきたんだ」

カムパネルラは、なぜかそう言いながら、少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいというふうでした。するとジヨバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるというような、おかしな気持ちが出来てしまいました。

ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直つて、勢いよく言いました。

「ああしまった。ぼく、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれどもかまわない。もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るなら、ほんとうにすきだ。川の遠くを飛んでいたつて、ぼくはきつと見える」

そして、カムパネルラは、まるい板のようになった地図を、しきりにぐるぐるまわして見ていました。まったく、その中に、白くあらわされた天の川の左の岸に沿って一条の鉄道線路が、南へ南へとたどつて行くのでした。そしてその地図の立派なことは、夜のよ

うにまつ黒な盤ばんの上に、一々の停車場ていしやばや三角標さんかくひょう、泉水せんすいや森が、青や橙だいだいみどりや緑や、うつくしい光でちりばめられてありました。

ジヨバンニはなんだかその地図ちずをどこかで見たとおもいました。

「この地図ちずはどこで買ったの。黒曜石こくようせきでできてるねえ」

ジヨバンニが言いました。

「銀河ぎんがステーションで、もらったんだ。君きみもらわなかったの」

「ああ、ぼく銀河ぎんがステーションを通つたろうか。いまぼくたちのいるとこ、ここだろう」

ジヨバンニは、白鳥と書いてある停車場ていしやばのしるしの、すぐ北を指さしました。

「そうだ。おや、あの河原かわらは月夜げんだろうか」そつちを見ますと、青白く光る銀河ぎんがの岸きしに、

銀いろの空のすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさら、ゆられてうごいて、波なみを立てているのでした。

「月夜でないよ。銀河ぎんがだから光るんだよ」ジヨバンニは言いながら、まるではね上がりたくらい愉快ゆかいになって、足をこつこつ鳴らし、窓まどから顔を出して、高く高く星めぐりの口くちぶえ笛ふえを吹きながら一生けん命めいの延びあがって、その天の川の水を、見きわめようと思いました
が、はじめはどうしてもそれが、はつきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて

見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素すいそよりもすきとおつて、ときどき眼めのかげんか、ちらちら紫むらさきいろのこまかな波なみをたてたり、虹にじのようにぎらつと光つたりしながら、声もなくどんだん流ながれて行き、野原にはあつちにもこつちにも、燐光りんこうの三角標さんかくひょうが、うつくしく立たつていたのです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙だいだいや黄いいろではつきりし、近いものは青白く少しかすんで、あるいは三角形さんかくけい、あるいは四辺形しへんけい、あるいは電いなや鎖なづまの形、さまざまにならんで、野原いっぱいに光っているのです。ジヨバンニは、まるでときどきして、頭あたまをやけに振ふりました。するとほんとうに、そのきれいな野原のほらじゆうの青あじや橙だいだいや、いろいろかがやく三角標さんかくひょうも、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたり顫ふるえたりしました。

「ぼくはもう、すっかり天の野原に来た」ジヨバンニは言いいました。

「それに、この汽車石炭せきたんをたいていないねえ」ジヨバンニが左手ひだりてをつき出して窓まどから前まへの方かたを見ながら言いいました。

「アルコールか電気だろう」カムパネルラが言いいました。

するとちやうど、それに返事へんじするように、どこか遠くの遠くのもやのもやの中から、セロ口くちのようなごうごうした声がきこえて来きました。

「この汽車は、ステイムや電気でうごいていない。ただうごくようにきまっているからうごいているのだ。ごとごと音をたてていると、そうおまえたちは思っているけれども、それはいままで音をたてる汽車にばかりなれているためなのだ」

「あの声、ぼくなんべんもどこかできいた」

「ぼくだって、林の中や川で、何べんも聞いた」

「ごとごとごとごと、その小さなきれいな汽車は、そらのすすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点さんかくてんの青じろい微光びこうの中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのでした。

「ああ、りんどうの花が咲さいている。もうすっかり秋だねえ」カムパネルラが、窓まどの外を指ゆびさして言いいました。

線路せんろのへりになったみじかい芝草しばくさの中に、月長石げつちようせきでも刻きざまれたような、すばらしい紫むらさきのりんどうの花が咲さいていました。

「ぼく飛とびおりに、あいつをとつて、また飛とび乗のってみせようか」ジヨバンニは胸むねをおどらせて言いいました。

「もうだめだ。あんなにうしろへ行いってしまつたから」

カムパネルラが、そう言^いつてしま^すうかしまわ^{ない}うち、次^{つぎ}のりんどうの花^が、いっばいに光^すつて過^すぎて行^きました。

と思^つつたら、もう次^{つぎ}から次^{つぎ}から、たくさんのきいろな底^{そこ}をもつたりんどうの花^のコップが、湧^わくように、雨^ののように、眼^めの前^をを通^り、三角^{さんかく}標^{ひょう}の列^{れつ}は、けむるように燃^もえるように、いよいよ光^つつて立^つつたのです。

七 北^{きた}十^{じゅう}字^じとプ^りオシ^ン海^{かい}岸^{がん}

「おつかさんは、ぼくをゆるしてくださるだろうか」

いきなり、カムパネルラが、思^い切^つつたというように、少^しどもりながら、せきこんで言^いいました。

ジヨバンニは、

(ああ、そうだ、ぼくのおつかさんは、あの遠^{たい}い一^{いっ}つ^{ぱい}のちりのように見^みえる橙^{だいだい}いろの三^{さん}角^{かく}標^{ひょう}のあたり^にいら^っしや^つて、いまぼくのことを考^かえているんだ^つた)と思^いいながら、ぼんやりしてだ^まつていま^した。

「ぼくはおつかさんが、ほんとうに幸さいわいになるなら、どんなことでもする。けれども、いたいどんなことが、おつかさんのいちばんの幸さいわいなんだろう」カムパネルラは、なんだか、泣なきだしたいのを、一生けん命めいこらえているようでした。

「きみのおつかさんは、なんにもひどいことないじゃないの」ジョバンニはびつくりして叫さけびました。

「ぼくわからない。けれども、誰だれだって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸さいわいなんだねえ。だから、おつかさんは、ぼくをゆるしてくださいと思う」カムパネルラは、なにかほんとうに決けつ心しんしているように見えました。

にわかには、車のなかで、ぼつと白く明るくなりました。見ると、もうじつに、金剛石こんごうせきや草の露つゆやあらゆる立派りっぱさをあつめたような、きらびやかな銀河ぎんがの河床かわどこの上を、水は声もなくかたちもなく流ながれ、その流ながれのまん中に、ぼうつと青白く後光ごこうの射さした一つの島しまが見えるのでした。その島の平たいらないただきに、立派りっぱな眼めもさめるような、白い十字架じゅうじかがたつて、それはもう、凍こおった北極ほっきょくの雲で鑄いたといったらしいか、すきつとした金いろの円光をいただいて、しずかに永えい久きゅうに立っているものでした。

「ハレルヤ、ハレルヤ」前からもうしろからも声が起おこりました。ふりかえって見ると、

車室の中の旅人たちは、みなまっすぐにきものひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の数珠をかけたたり、どの人もつましく指を組み合わせて、そっちに祈っているのです。思わず二人ともまっすぐに立ちあがりました。カムパネルラの頬は、まるで熟した苹果のあかしのようにつくしくかがやいて見えました。

そして島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行きました。

向こう岸も、青じろくぼうつと光つてけむり、時々、やつぱりすすきが風にひるがえるらしく、さつとその銀いろがけむって、息でもかけたように見え、また、たくさんのりんどうの花が、草をかくれたり出たりするのは、やさしい狐火のように思われました。

それもほんのちよつとの間、川と汽車との間は、すすきの列でさえぎられ、白鳥の島は、二度ばかり、うしろの方に見えましたが、じきもうずうつと遠く小さく、絵のようになつてしまい、またすすきがざわざわ鳴つて、とうとうすっかり見えなくなつてしまいました。ジヨバンニのうしろには、いつから乗つていたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカトリックふうの尼さんが、まんまるな緑の瞳を、じつとまっすぐに落として、まだ何かことばか声かが、そっちから伝わって来るのを、虔んで聞いているというように見えました。旅人たちはしずかに席に戻り、二人も胸いっばいのかなしみに似た新しい気持ち、何

気なくちがった語ことばで、そつと談はなし合つたのです。

「もうじき白鳥の停車場ていしやばだねえ」

「ああ、十一時かつきりには着つくんだよ」

早くも、シグナルの緑みどりの燈と、ぼんやり白い柱はしらとが、ちらつと窓まどのそとを過すぎ、それから硫黄いおうのほのおのようなくらいぼんやりした転てんてつ機きの前のあかりが窓まどの下を通り、汽車はだんだんゆるやかになつて、まもなくプラットホームの行列れつの電燈でんとうが、うつくしく規則そく正しくあらわれ、それがだんだん大きくなつてひろがつて、二人はちようど白鳥停車場ていしやばの、大きな時計とけいの前まへに来てとまりました。

さわやかな秋の時計とけいの盤ばん面めんには、青く灼やかれたはがねの二本の針はりが、くつきり十一時を指さしました。みんなは、一ぺんにおりて、車室の中はがらんとなつてしまいました。

「二十分停車ていしや」と時計とけいの下したに書いてありました。

「ぼくたちも降りて見ようか」ジヨバンニが言いいました。

「降りよう」二人は一度にはねあがつてドアを飛とび出して改札口かいさつぐちへかけて行きました。ところが改札口かいさつぐちには、明るい紫むらさきがかつた電燈でんとうが、一つ点つ点ついているばかり、誰だれもいませんでした。そこらじゆうを見ても、駅えきちよう長ちやうや赤帽あかぼうらしい人の、影かげもなかつたのです。

ふたりは、停車場の前の、水晶細工のように見える銀杏の木に囲まれた、小さな広場に出ました。

そこから幅の広いみちが、まっすぐに銀河の青光の中へ通っていました。

さきに降りた人たちは、もうどこへ行ったか一人も見えませんでした。二人がその白い道を、肩をならべて行きますと、二人の影は、ちようど四方に窓のある室の中の、二本の柱の影のように、また二つの車輪の輻のように幾本も幾本も四方へ出るのです。そしてまもなく、あの汽車から見えたきれいな河原に来ました。

カムパネルラは、そのきれいな砂を一つまみ、掌にひろげ、指できしきしさせながら、夢のように言っているのです。

「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている」

「そうだ」どこでぼくは、そんなことを習ったろうと思ひながら、ジヨバンニもぼんやり答えています。

河原の礫は、みんなすきとおつて、たしかに水晶や黄玉や、またくしゃくしゃの皺曲をあらわしたのや、また稜から霧のような青白い光を出す鋼玉やらでした。

ジヨバンニは、走つてその渚に行つて、水に手をひたしました。けれどもあやしいその銀

河の水は、水素よりもつとすきとおつていたのです。それでもたしかに流れていたことは、二人の手首の、水にひたつたところが、少し水銀いろに浮いたように見え、その手首にぶつつかつてできた波は、うつくしい燐光をあげて、ちらちらと燃えるように見えたのでもわかりました。

川上の方を見ると、すすきのいっぱいにはえている崖の下に、白い岩が、まるで運動場のように平らに川に沿つて出ているのでした。そこに小さな五、六人の人があげが、何か掘り出すか埋めるかしているらしく、立つたりかがんだり、時々なにかの道具が、ピカツと光つたりしました。

「行つてみよう」二人は、まるで一度に叫んで、そつちの方へ走りしました。その白い岩になつたところの入口に、「プリオシン海岸」という、瀬戸物のつるつるした標札が立つて、向こうの渚には、ところどころ、細い鉄の欄干も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

「おや、変なものがあるよ」カムパネルラが、不思議そうに立ちどまって、岩から黒い細長いさきのがつたくるみの実のようなものをはひろいました。

「くるみの実だよ。そら、たくさんある。流れて来たんじゃない。岩の中にはいつてるん

だ」

「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない」

「早くあすこへ行つて見よう。きつと何か掘つてるから」

二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさっきの方へ近よつて行きまし
た。左手の渚には、波がやさしい稲妻のように燃えて寄せ、右手の崖には、いちめん銀
や貝殻でこさえたようなすすきの穂がゆれたのです。

だんだん近づいて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはい
た学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけながら、つるはしをふりあげた
り、スコップをつかつたりしている、三人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図
をしていました。

「そのその突起をこわさないように、スコップを使いたまえ、スコップを。おっと、も
少し遠くから掘つて。いけない、いけない、なぜそんな乱暴をするんだ」

見ると、その白い柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が、横に倒れてつ
ぶれたというふうになつて、半分以上掘り出されていました。そして気をつけて見る
と、そこらには、蹄の二つある足跡のついた岩が、四角に十ばかり、きれいに切り取ら

れて番号ばんごうがつけられてありました。

「君たちは参観さんかんかね」その大学士だいがくしらしい人が、眼鏡めがねをきらつとさせて、こつちを見て話しかけました。

「くるみがたくさんあつたらう。それはまあ、ぎつと二億二千万まんねん年ぐらい前のくるみだよ。ごく新しい方かたさ。ここは二億二千万まんねん年前、第三紀だいさんきのあとのころは海岸かいがんでね、この下からは貝かいがらも出る。いま川の流れているところに、そつくり塩水しおみずが寄せたり引いたりもしていたのだ。このけものかね、これはボスといつてね、おいおい、そこ、つるはしはよしたまえ。ていねいに鑿のみでやつてくれたまえ。ボスといつてね、いまの牛うしの先祖せんぞで、昔むかしはたくさんいたのさ」

「標本ひょうほんにするんですか」

「いや、証明しょうめいするに要いるんだ。ぼくらから見ると、ここは厚あつい立派りっぱな地層ちそうで、二億二千万まんねん年ぐらい前にできたという証拠しょうこもいろいろあがるけれども、ぼくらとちがつたやつからみてもやつぱりこんな地層ちそうに見えるかどうか、あるいは風か水や、がらんとした空かに見えやしないかということなのだ。わかつたかい。けれども、おいおい、そこもスコツプではいけない。そのすぐ下に肋骨ろっこつが埋うもれてるはずじゃないか」

大学士はあわてて走って行きました。

「もう時間だよ。行こう」カムパネルラが地図と腕時計とをくらべながら言いました。

「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします」ジヨバンニは、ていねいに大学士におじぎしました。

「そうですか。いや、さよなら」大学士は、また忙しそうに、あちこち歩きまわって監督をはじめました。

二人は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないように走りました。そしてほんとうに、風のように走れたのです。息も切れず膝もあつくありませんでした。

こんなにしてかけるなら、もう世界じゅうだつてかけれると、ジヨバンニは思いました。そして二人は、前のあの河原を通り、改札口の電燈がだんだん大きくなって、まもなく二人は、もとの車室の席にすわっていま行って来た方を、窓から見えました。

八 鳥を捕る人

「ここへかけてもようございますか」

がさがさした、けれども親切そうな、大人おとなの声こゑが、二人ふたりのうしろで聞こえました。

それは、茶いろの少しぼろぼろの外がい套とうを着きて、白しろい巾きんでつっんだ荷にもつ物を、二つに分けて肩かたに掛かけた、赤あか髯ひげのせなかのかがんだ人ひとでした。

「ええ、いいんです」ジヨバンニは、少し肩かたをすぼめてあいさつしました。その人は、ひげの中なかでかすかに微笑わらいながら荷にもつ物をゆっくり網あみ棚だなにのせました。ジヨバンニは、なにかたいへんさびしいようなかなしいような気がして、だまって正しょう面めんの時とけい計けいを見ていましたら、ずうつと前まえの方かたで、硝がらす子のふえ笛ふえのようなものが鳴なりました。汽車くるまはもう、しずかにうごいていたのです。カムパネルラは、車くるま室むらの天てん井じょうを、あちこち見ていました。その一つのあかりに黒くろい甲かぶと虫むしがとまって、その影かげが大大おおきく天てん井じょうにうつっていたのです。赤あかひげの人は、なになつかしそうにわらいながら、ジヨバンニやカムパネルラのようなすを見ていました。汽車くるまはもうだんだん早くはやくなって、すすきと川かわと、かわるがわる窓まどの外そとから光ひかりりました。

赤あかひげの人が、少しおずおずしながら、二人ふたりに訊ききました。

「あなた方は、どちらへいらつしやるんですか」

「どこまでも行くんです」ジヨバンニは、少しきまり悪わるそうに答えました。

「それはいいね。この汽車は、じつさい、どこまででも行きますぜ」

「あなたはどこへ行くんです」カムパネルラが、いきなり、喧嘩けんかのようにたずねましたので、ジヨバンニは思わずわらいました。すると、向むこうの席せきにいた、とがった帽子ぼうしをかぶり、大きな鍵かぎを腰こしに下げた人も、ちらっとこつちを見てわらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑わらいだしてしまいました。ところがその人は別べつにおこつたでもなく、頬ほおをびくびくしながら返事へんじをしました。

「わつしはすぐそこで降おります。わつしは、鳥をつかまえる商しょう売ばいでね」

「何鳥ですか」

「鶴つるや雁がんです。さぎも白鳥もです」

「鶴はたくさんいますか」

「いますとも、さつきから鳴いてまさあ。聞かなかつたのですか」

「いいえ」

「いまでも聞こえるじゃありませんか。そら、耳をすまして聴きいてごらんなさい」

二人ふたりは眼めを挙あげ、耳をすましました。ごどごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧わくような音が聞こえて来るのでした。

「鶴、どうしてとるんですか」

「鶴ですか、それとも鷺ですか」

「鷺です」ジヨバンニは、どっちでもいいと思いつながら答えました。

「そいつはな、雑作ない。さぎというものは、みんな天の川の砂が凝って、ぼおつとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待っていて、鷺がみんな、脚をこういうふうにしておりてくるとこを、そいつが地べたへつくつかつかないうちに、びたつと押えちまうんです。するともう鷺は、かたまつて安心して死んじまいます。あとはもう、わかり切つてまさあ。押し葉にするだけです」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか」

「標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか」

「おかしいねえ」カムパネルラが首をかしげました。

「おかしいも不審ありませんや。そら」その男は立つて、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。

「さあ、ごらんなさい。いまとつて来たばかりです」

「ほんとうに鷺だねえ」二人は思わず叫びました。まっ白な、あのさっきの北の十字架

のように光る鷺さぎのからだだが、十ばかり、少しひらべったくなくなって、黒い脚あしをちぢめて、浮う彫きぼりのようにならないのです。

「眼めをつぶつてるね」カムパネルラは、指ゆびでそつと、鷺さぎの三日月みかづきがたの白いつぶつた眼めにさわりました。頭あたまの上の槍やりのような白い毛もちゃんといっていました。

「ね、そうでしょう」鳥捕とりとりは風呂敷ふろしきを重ねかさねて、またくるくと包つつんで紐ひもでくりました。誰だれかいったいこちらで鷺さぎなんぞたべるだろうとジヨバンニは思いながら訊ききました。

「鷺さぎはおいしいんですか」

「ええ、毎日注ちゆうもん文ぶんがあります。しかし雁がんの方が、もつと売れます。雁がんの方がずつと柄がらがいいし、第一手数だいいちてすうがありませんからな。そら」鳥捕とりとりは、また別べつの方かたの包つつみを解ときました。すると黄と青じろとまだらになって、なにかのあかりのようにひかる雁がんが、ちょうどさつきの鷺さぎのように、くちばしをそろえて、少しひらべったくなくなって、ならんでいました。

「こつちはすぐたべられます。どうです、少しおあがりなさい」鳥捕とりとりは、黄いろの雁がんの足を、軽かるくひっぱりました。するとそれは、チョコレートでもできているように、すつときれいにはなれました。

「どうです。すこしたべてごらん下さい」鳥捕りは、それを二つにちぎってわたしました。ジヨバンニは、ちよつとたべてみて、

（なんだ、やつぱりこいつはお菓子だ。チョコレートよりも、もつとおいしいけれども、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこかそこの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、たいへんきのどくだ）とおもいながら、やつぱりほくほくそれをたべていました。

「もう少しおあがりなさい」鳥捕りがまた包みを出しました。ジヨバンニは、もつとたべたかつたのですけれども、

「ええ、ありがとう」といって遠慮しましたら、鳥捕りは、こんどは向こうの席の、鍵をもつた人に出しました。

「いや、商売ものももらつちやすみませんな」その人は、帽子をとりました。

「いいえ、どういたしまして。どうです、今年の渡り鳥の景気は」

「いや、すてきなもんですよ。一昨日の第二限ころなんか、なぜ燈台の灯を、規則以外に間（一時空白）させるかつて、あつちからもこつちからも、電話で故障が来ましたが、なあに、こつちがやるんじやなくて、渡り鳥どもが、まっ黒にかたまつて、あかしの

前を通るのですからしかたありませんや、わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれ
 のとこへ持つて来たつてしかたがねえや、ばさばさのマントを着て脚と口との途方もなく
 細い大将へやれつて、こう言つてやりましたがね、はつは」

すすきがなくなつたために、向こうの野原から、ぱつとあかりが射して来ました。

「鷺の方はなぜ手数なんですか」カムパネルラは、さつきから、訊こうと思つていたので
 す。

「それはね、鷺をたべるには」鳥捕りは、こつちに向き直りました。「天の川の水あかり
 に、十日もつるしておくかね、そうでなけあ、砂に三、四日うずめなけあいけないんだ。

そうすると、水銀がみんな蒸発して、たべられるようになるよ」

「こいつは鳥じやない。ただのお菓子でしょう」やつぱりおなじことを考えていたとみえ
 て、カムパネルラが、思い切つたというように、尋ねました。鳥捕りは、何かたいへんあ
 わてたふうで、

「そうそう、ここで降りなけあ」と言いながら、立つて荷物をとつたと思うと、もう見え
 なくなつていました。

「どこへ行つたんだらう」二人は顔を見合わせましたら、燈台守は、にやにや笑つて、

少し伸びあがるようにしながら、二人の横よこの窓まどの外そとをのぞきました。二人もそつちを見ましたら、たつたいまの鳥捕りとりとが、黄いろと青じろの、うつくしい燐光りんこうを出す、いちめんのかわらははこぐさの上に立つて、まじめな顔をして両手りょうてをひろげて、じつとそらを見ていたのです。

「あすこへ行つてる。ずいぶん奇体きたいだねえ。きつとまた鳥をつかまえるとこだねえ。汽車が走つて行かないうちに、早く鳥がおけるといいな」と言いつたとたん、がらんとした枯き梗えいいろの空から、さつき見たような鷺さぎが、まるで雪の降ふるようになり、ぎやあぎやあ叫さけびながら、いっぱいまに舞いおりて来きました。するとあの鳥捕りとりとは、すつかり注ちゆうもん文通りだといいうようにほくほくして、両足りょうあしをかつきり六十度どに開いて立つて、鷺さぎのちぢめて降おりて来る黒い脚あしを両手りょうてで片かたつぱしから押おえて、布ぬのの袋ふくろの中ちゆうに入れるのでした。すると鷺さぎは、蛸ほたるのように、袋ふくろの中でしばらく、青くペかペか光あかりつたり消きえたりしていましたが、おしまいとうとう、みんなぼんやり白しろくなつて、眼めをつぶるのでした。ところが、つかまえられる鳥よりは、つかまえられるおいで無む事に天あまの川がはの砂すなの上に降おりるものの方が多おほかつたのです。それは見ていると、足あしが砂すなへつくや否いなや、まるで雪ゆきの解とけるように、縮ちぢまってひらべつたくなつて、まもなく溶よう鉈こうろから出でた銅どうの汁じゅうのように、砂すなや砂利じやりの上にひろがり、し

ばらくは鳥の形が、砂すなについているのですが、それも二、三度明ほどるくなったり暗くらくなったりしているうちに、もうすっかりまわりと同じいろになってしまふのでした。

鳥捕とりとりは、二十疋びきばかり、袋ふくろに入れてしまふと、急きゆうに両手りょうてをあげて、兵隊へいたいが鉄砲てつぽう弾たまにあたつて、死ぬしときのような形をしました。と思つたら、もうそこに鳥捕とりとりの形はなくなつて、かえつて、

「ああせいせいした。どうもからだにちょうど合うほど稼かせいでいるくらい、いいことはありません」というききおぼえのある声が、ジヨバンニの隣となりにしました。見ると鳥捕とりとりは、もうそこであつて来た鷺さぎを、きちんとそろえて、一つずつ重ねかさ直なおしているのです。

「どうして、あすこから、いつぺんにここへ来たんですか」ジヨバンニが、なんだかあたりまえのような、あたりまえでないような、おかしな気がして問といました。

「どうしてって、来ようとしたから来たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいでですか」

ジヨバンニは、すぐ返事へんじをしようと思ひましたけれども、さあ、ぜんたいどこから来たのか、もうどうしても考えつきませんでした。カムパネルラも、顔をまっ赤にして何か思ひ出そうとしているのです。

「ああ、遠くからですね」鳥捕りは、わかつたというように雑作なくうなずきました。

九 ジョバンニの切符

「もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です」

窓の外の、まるで花火でいっぱいのような、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四棟ばかり立って、その一つの平屋根の上に、眼もさめるような、青宝玉と黄玉の大きな二つのすきとおった球が、輪になつてしずかにくるとまわっていました。黄いろのがだんだん向こうへまわつて行つて、青い小さいのがこちへ進んで来、まもなく二つのはじは、重なり合つて、きれいな緑いろの両面凸レンズのかたちをつくり、それもだんだん、まん中がふくらみだして、とうとう青いのは、すっかりトパーズの正面に来ましたので、緑の中心と黄いろな明るい環とができました。それがまただんだん横へ外れて、前のレンズの形を逆にくり返し、とうとうすつとはなれて、サファイアは向こうへめぐり、黄いろのはこちへ進み、またちようどさっきのようなふうになりました。銀河

の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんとうにその黒い測候所が、睡っているように、しずかによこたわったのです。

「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……」鳥捕りが言いかけたとき、

「切符を拜見いたします」三人の席の横に、赤い帽子をかぶったせいの高い車掌が、いつかまっすぐに立っていて言いました。鳥捕りは、だまってかくしから、小さな紙きれを出しました。車掌はちよつと見て、すぐ眼をそらして（あなた方のは？）というように、指をうごかしながら、手をジヨバンニたちの方へ出しました。

「さあ」ジヨバンニは困って、もじもじしていましたら、カムパネルラはわけもないというふうで、小さな鼠いろの切符を出しました。ジヨバンニは、すっかりあわててしまつてもしか上着のポケットにでも、はいっていたかとおもいながら、手を入れてみましたら、何か大きなたんだ紙きれにあたりました。こんなものはいっていたろうかと思つて、急いで出してみましたら、それは四つに折つたはがきぐらいの大きな緑いろの紙でした。車掌が手を出しているもんですからなんでもかまわれない、やつちまえと思つて渡ししましたら、車掌はまっすぐに立ち直つていねいにそれを開いて見ていました。そして読みながら上着のぼたんやなんかしきりに直したりしていましたし燈台看守も下からそ

れを熱心にのぞいていましたから、ジヨバンニはたしかにあれは証明書か何かだつたと考えて少し胸が熱くなるような気がしました。

「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか」車掌がたずねました。

「なんだかわかりません」もう大丈夫だと安心しながらジヨバンニはそつちを見あげてくつくつ笑いました。

「よろしゅうございます。南十字へ着きますのは、次の第三時ころになります」車掌は紙をジヨバンニに渡して向こうへ行きました。

カムパネルラは、その紙切れが何だつたか待ちかねたというように急いでのできこみました。ジヨバンニも全く早く見たかつたのです。ところがそれはいちめん黒い唐草のよな模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したもので、だまつて見ているとなかその中へ吸い込まれてしまうような気がするのです。すると鳥捕りが横からちらつとそれを見てあわてたように言いました。

「おや、こいつはたいしたもんですぜ。こいつはもう、ほんとうの天上へさえ行ける切符だ。天上どこじやない、どこでもかつてにあるける通行券です。こいつをお持ちになれば、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける

はずでさあ、あなた方たいしたもんですね」

「なんだかわかりません」ジヨバンニが赤くなつて答えながら、それをまたたたんでかくしに入れました。そしてきまりが悪いのでカムパネルラと二人、また窓の外をながめていましたが、その鳥捕りの時々たいしたもんだというように、ちらちらこつちを見ているのがぼんやりわかりました。

「もうじき鷺の停車場だよ」カムパネルラが向こう岸の、三つならんだ小さな青じろい三角標と、地図とを見くらべて言いました。

ジヨバンニはなんだかわけもわからずに、にわかにとなりの鳥捕りがきのどくでたまらなくなりしました。鷺をつかまえてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびつくりしたように横目で見てあわててほめだしたり、そんなことを一々考えていると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジヨバンニの持つているものでも食べるものでもなんでもやっつてしまいたい、もうこの人のほんとうの幸になるなら、自分があの光る天の川の河原に立つて百年つづけて立つて鳥をとってやっつてもいいというような気がして、どうしてももう黙つていられなくなりました。ほんとうにあなたのほしいものはいったい何ですかと訊こうとして、それではあんまり出し抜けだから、ど

うしようかとか考えてふり返つて見ましたら、そこにはもうあの鳥捕りがいませんでした。網棚の上には白い荷物も見えなかったのです。また窓の外で足をふんばってそらを見上げて鷺を捕るしたくをしているのかと思つて、急いでそちを見ましたが、外はいちめんのうつくしい砂子と白いすすきの波ばかり、あの鳥捕りの広いせなかもとがった帽子も見えませんでした。

「あの人どこへ行つたらう」カムパネルラもぼんやりそう言っていました。

「どこへ行つたらう。いったいどこでまたあうのだらう。僕はどうしても少しあの人に物を言わなかつたらう」

「ああ、僕もそう思っているよ」

「僕はある人が邪魔なような気がしたんだ。だから僕はたいへんつらい」ジョバンニはこんなへんてこな気もちは、ほんとうにはじめてだし、こんなこと今まで言つたこともないと思ひました。

「なんだか苹果のにおいがする。僕いま苹果のことを考えたためだらうか」カムパネルラが不思議そうにあたりを見まわしました。

「ほんとうに苹果のにおいだよ。それから野茨のにおいもする」

ジヨバンニもそこらを見ましたがやっぱりそれは窓からでもはいつて来るらしいのでした。いま秋だから野茨のいばらの花のにおいのはずはないとジヨバンニは思いました。

そしたらにわかになにに、つやつやした黒い髪かみの六つばかりの男の子が赤いジャケツのぼたんもかけず、ひどくびつくりしたような顔をして、がたがたふるえてはだしで立っていました。隣となりには黒い洋服ようふくをきちんと着たせいの高い青年がいつぱいに風に吹かれていた。隣の木のような姿勢しせいで、男の子の手をしっかりとひいて立っていました。

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだわ」青年のうしろに、もひとり、十二ばかりの眼めの茶いろな可愛かわいらしい女の子が、黒い外套がいとうを着て青年の腕うでにすがって不思議ふしぎそうに窓まじの外そとを見ているのでした。

「ああ、ここはランカシャイヤだ。いや、コンネクテカット州しゅうだ。いや、ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神かみさまに召めされているのです」黒服くろふくの青年はよろこびにかがやいてその女の子に言いいました。けれどもなぜかまた額ひたいに深く皺しわを刻きぎんで、それにたいへんつかれていらしく、無理むりに笑わらいながら男の子をジヨバンニのとなりになすわらせました。それから女の子にやさしくカムパネルラとなり

の席を指さしました。女の子はすなおにそこへすわって、きちんと両手を組み合わせました。

「ぼく、おおねえさんのところへ行くんだよう」腰掛けたばかりの男の子は顔を変にして燈台看守の向こうの席にすわったばかりの青年に言いました。青年はなんとも言えず悲しそうな顔をして、じつとその子の、ちぢれたぬれた頭を見ました。女の子は、いきなり両手を顔にあててしくしく泣いてしまいました。

「お父さんやきくよねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらつしやいます。それよりも、おつかさんはどんなに長く待つていらつしやったでしょう。わたしの大事な歌をうたっているだろう、雪の降る朝にみんなと手をつないで、ぐるぐるにわとこのやぶをまわつてあそんでいるだろうかと考えたり、ほんとうに待つて心配していらつしやるんですから、早く行って、おつかさんにお目にかかりましょうね」

「うん、だけど僕、船に乗らなけあよかつたなあ」

「ええ、けれど、ごらんさい、そら、どうです、あの立派な川、ね、あすこはあの夏じゆう、ツインクル、ツインクル、リトル、スターをうたつてやすむとき、いつも窓からぼ

んやり白く見えていたでしょう。あすこですよ。ね、きれいでしよう、あんなに光つています」

泣ないていた姉あねもハンケチで眼めをふいて外を見ました。青年は教えるようにそつと姉きょうだ弟いにまた言いいました。

「わたしたちはもう、なんにもかなしいことないのです。わたしたちはこんないところを旅たびして、じき神かみさまのどこへ行きます。そこならもう、ほんとうに明るくておいがよくて立派りっぱな人たちでいっぱいです。そしてわたしたちの代かわりにボートへ乗のれた人たちは、きつとみんな助たすけられて、心しんぱい配まして待つているめいめいのお父さんやお母さんや自分のお家へやら行くのです。さあ、もうじきですから元氣を出しておもしろくうたって行きましょう」青年は男の子のぬれたような黒い髪かみをなで、みんなを慰なぐさめながら、自分もだんだん顔いろがかがやいてきました。

「あなた方はどちらからいらつしやったのですか。どうなすつたのですか」

さつきの燈とうだい台かんしゆ看守かんしゆがやつと少しわかったように青年にたずねました。青年はかすかにわらいました。

「いえ、氷ひょうざん山さんにぶつつかつて船ぶねが沈しずみましてね、わたしたちはこちらのお父きゆうさんが急

な用で二か月前、一足さきに本国へお帰りになったので、あとから発ったのです。私は大
学へはいっていて、家庭教師にやとわれていたのです。ところがちようど二十二日目、今
日か昨日のあたりです、船が氷山にぶつつかつて一ぺんに傾きもう沈みかけました。
月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かったです。ところがボー
トは左舷の方半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないので
す。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となつて、どうか小さな人たちを乗せて
くださいと叫びました。近くの人たちはすぐみちを開いて、そして子供たちのために祈つ
てくれました。けれどもそこからボートまでのところには、まだまだ小さな子どもたちや
親たちやなんかいて、とても押しつける勇氣がなかつたのです。それでもわたくしはどう
してもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思ひましたから前にいる子供らを押し
けようと思いました。けれどもまた、そんなにして助けてあげるよりはこのまま神の御前に
みんなで行く方が、ほんとうにこの方たちの幸福だとも思ひました。それからまた、そ
の神にそむく罪はわたくしひとりですよつてせひとも助けてあげようと思ひました。けれ
ども、どうしても見ているとそれができないのでした。子どもらばかりのボートの中へは
なしてやつて、お母さんが狂氣のようにキスを送りお父さんがかなしいのをじつとこら

えてまつすぐに立っているなど、とてももう腸もちぎれるようでした。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私たちはかたまつて、もうすっかり覚悟して、この人たち二人を抱いて、浮かべるだけは浮かぼうと船の沈むのを待っていました。誰が投げたかライフブイが一つ飛んで来ましたけれどもすべつてうつつと向こうへ行つてしまいました。私は一生けん命で甲板の格子になったとこをはなして、三人それにしっかりとつきましました。どこからともなく三〇六番の声があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたいました。そのときにわかには大きな音がして私たちは水に落ち、もう渦にはいったと思ひながらしつかりこの人たちをだいて、それからぼうつとしたと思つたらもうここへ来ていたのです。この方たちのお母さんは一昨年没くなられました。ええ、ボートはきつと助かったにちがいありません、なにせよほど熟練な水夫たちが漕いで、すばやく船からはなれていましたから」

そこから小さな嘆息やいのりの声が聞こえジョバンニもカムパネルラもいまままで忘れていたいろいろのことをぼんやり思い出して眼が熱くなりました。

（ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかったらうか。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗つて、風や凍りつく潮水や、はげしい寒さとたたかっ

て、たれかが一生けんめいはたらいっている。ぼくはそのひとにほんとうにきのどくです。すまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのためにいつたいどうしたらいいのだろう)

ジョバンニは首をたれて、すっかりふさぎ込んでしまいました。

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただしいみちを進む中でできごとなら、峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づくと一あしずつですから」

燈台守がなぐさめていました。

「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです」

青年が祈るようにそう答えました。

そしてあの姉弟はもうつかれてめいめいぐったり席によりかかって睡っていました。さつきのあのはだしだった足にはいつか白い柔らかな靴をはいていたのです。

ごごとごとごとと汽車はきらびやかな燐光の川の岸を進みました。向こうの方の窓を見ると、野原はまるで幻燈のようでした。百も千もの大小さまさまの三角標、その

大きなものの上には赤い点々をうった測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集まってぼおつと青白い霧のよう、そこからか、またはもつと向こうからか、ときどきさまさまの形のぼんやりした狼煙のようなものが、かわるがわるきれいな桔梗いろのそらにうちあげられるのでした。じつにそのすきとおった奇麗な風は、ばら

のにおいでいっぱいでした。

「いかがですか。こういう苹果はおはじめてでしょう」向こうの席の燈台看守がいつか黄金と紅でうつくしくいろどられた大きな苹果を落とさないように両手で膝の上にかかえていました。

「おや、どつから来たのですか。立派ですなえ。ここらではこんな苹果ができるのですか」青年はほんとうにびつくりしたらしく、燈台看守の両手にかかえられた一もりの苹果を、眼を細くしたり首をまげたりしながら、われを忘れてながめていました。

「いや、まあおとりください。どうか、まあおとりください」

青年は一つとつてジヨバンニたちの方をちよつと見ました。

「さあ、向こうの坊ちゃんがた。いかがですか。おとりください」

ジヨバンニは坊ちゃんといわれたので、すこししゃくにさわってだまっていますでしたが、

カムパネルラは、

「ありがとう」と言いました。

すると青年は自分でとつて一つずつ二人に送つてよこしましたので、ジヨバンニも立つて、ありがとうと言いました。

燈台看守はやつと両腕があいたので、こんどは自分で一つずつ睡っている姉弟の膝にそつと置きました。

「どうもありがとう。どこでできるのですか。こんな立派な苹果は」

青年はつくづく見ながら言いました。

「この辺ではもちろん農業はいたしますけれど面白いひとりでいいものができるような約束になっております。農業だつてそんなにほねはおれはしません。たいてい自分の望む種子さえ播けばひとりでどんどんできます。米だつてパシフィック辺のように殻もないし十倍も大きくてにおいもいいのです。けれどもあなたがたのいらっしゃる方なら農業はもうありません。苹果だつてお菓子だつて、かすが少しもありませんから、みんなそのひとそのひとによつてちがった、わずかのいいかおりになつて毛あなからちらけてしまうのです」

にわかに男の子がぼつちり眼をあいて言いました。

「ああぼくいまお母さんの夢をみていたよ。お母さんがね、立派な戸棚や本のあるところにいてね、ぼくの方を見て手をだしてにこにこにこにこわらったよ。ぼく、おつかさん。りんごをひろつてきてあげましょうか、と言ったら眼がさめちやった。ああここ、さっきの汽車のなかだねえ」

「その苹果がそこにあります。このおじさんにいただいたのですよ」青年が言いました。

「ありがとうございます。おや、かおるねえさんまだねてるねえ、ぼくおこしてやろう。ねえさん。ごらん、りんごをもらったよ。おきてごらん」

姉はわらつて眼をさまし、まぶしそうに両手を眼にあてて、それから苹果を見ました。男の子はまるでパイをたべるように、もうそれをたべていました。またせつかくむいたそのきれいな皮も、くるくるコルク抜きのような形になって床へ落ちるまでの間にはすうつと、灰いろに光つて蒸発してしまふのでした。

二人はりんごをたいせつにポケットにしまいました。

川下の向こう岸に青く茂つた大きな林が見え、その枝には熟してまっ赤に光るまるい実がいっぱい、その林のまん中に高い高い三角標が立って、森の中からはオーケストラ

ベルやジロフォンにまじってなんとも言えずきれいな音いろが、とけるように浸みるように風につれて流れて来るのでした。

青年はぞくつとしてからだをふるうようにしました。

だまつてその譜を聞いていると、そこらにいちめん黄いろや、うすい緑の明るい野原か敷物かがひろがり、またまつ白な蠟のような露が太陽の面をかすめて行くように思われしました。

「まあ、あの鳥」カムパネルラのとりの、かおると呼ばれた女の子が叫びました。

「からすでない。みんなかささぎだ」カムパネルラがまた何気なくしかるように叫びましたので、ジヨバンニはまた思わず笑い、女の子はきまり悪そうにしました。まったく河原の青じろいあかりの上に、黒い鳥がたくさんたくさんいっぱいに列になってとまつてじつと川の微光を受けているのでした。

「かささぎですねえ、頭のうしろのところに毛がぴんと延びてますから」青年はとりなすように言いました。

向こうの青い森の中の三角標はすっかり汽車の正面に来ました。そのとき汽車のずうつとうしろの方から、あの聞きなれた三〇六番の讚美歌のふしが聞こえてきました。

よほどの人数で合がっし唱しょうしているらしいのでした。青年はさっと顔いろが青ざめ、たつて一ぺんそつちへ行きそうにしましたが思いかえしてまたすわりました。かおる子はハンケチを顔にあててしまいました。

ジヨバンニまでなんだか鼻はなが変へんになりました。けれどもいつともなく誰だれともなくその歌は歌い出されだんだんはつきり強くなりました。思わずジヨバンニもカムパネルラもいっしょにうたいだしたのです。

そして青い橄欖かんらんの森が、見えない天の川の向むこうにさめざめと光りながらだんだんうしろの方へ行つてしまい、そこから流ながれて来るあやしい樂器がっきの音も、もう汽車のひびきや風の音にすりへらされてずうつかすかになりました。

「あ、孔雀くじゃくがいるよ。あ、孔雀くじゃくがいるよ」

「あの森琴ライラヤトの宿やどでしょう。あたしきつとあの森の中にむかしの大きなオーケストラの人たちが集あつまっていらつしやると思うわ、まわりには青い孔雀くじゃくやなんかたくさんいると思うわ」

「ええ、たくさんいたわ」女の子がこたえました。

ジヨバンニはその小さく小さくなつていまはもう一つの緑みどりいろの貝かいぼたんのように見える

る森の上にさつさつと青じろく時々光つてその孔雀くじやくがはねをひろげたりとじたりする光の反射はんしゃを見ました。

「そうだ、孔雀くじやくの声だつてさつき聞こえた」カムパネルラが女の子に言いました。

「ええ、三十疋びきぐらいはたしかにいたわ」女の子が答えました。

ジョバンニはにわかになんとも言えずかなしい気がして思わず、

「カムパネルラ、ここからはねおりて遊あそんで行こうよ」とこわい顔をして言おうとしたくらいでした。

ところがそのときジョバンニは川下の遠くの方に不思議なものを見ました。それはたしかになにか黒いつるつるした細ほそなが長いもので、あの見えない天の川の水の上に飛び出してちよつと弓ゆみのようなかたちに進すすんで、また水の中にかくれたようでした。おかしいと思つてまたよく気をつけていましたら、こんどはずつと近くでまたそんなことがあつたらしいのでした。そのうちもうあつちでもこつちでも、その黒いつるつるした変へんなものが水から飛び出して、まるく飛とんでまた頭から水へくぐるのがたくさん見えてきました。みんな魚のように川上へのぼるらしいのでした。

「まあ、なんででしょう。たあちゃん。ごらんなさい。まあたくさんだわね。なんででしょう

あれ」

「睡ねむそうに眼めをこすっていた男の子はびっくりしたように立ちあがりました。

「なんだろう」青年も立ちあがりました。

「まあ、おかしな魚だわ、なんででしょうあれ」

「海豚いるかです」カムパネルラがそつちを見ながら答えました。

「海豚いるかだなんてあたしはじめてだわ。けどここ海じゃないんでしょう」

「いるかは海にいるときまっていけない」あの不思議ふしぎな低い声ひくがまたどこからかしました。

ほんとうにそのいるかのかたちのおかしいことは、二つのひれをちやうど両手りょうてをさげ

て不動ふどうの姿勢しせいをとったようなふうにして水の中から飛び出して来て、うやうやしく頭を下

にして不動ふどうの姿勢しせいのまままた水の中へくぐって行くのでした。見えない天の川の水もその

ときはゆらゆらと青い焰ほのおのように波なみをあげるのでした。

「いるかお魚でしょうか」女の子がカムパネルラにはなしかけました。男の子はぐったり

つかれたように席せきにもたれて睡ねむっていました。

「いるか、魚じゃありません。くじらと同じようなけだものです」カムパネルラが答えま

した。

「あなたくじら見たことあって」

「僕ぼくあります。くじら、頭と黒いしつぽだけ見えます。潮しほを吹ふくどちようど本にあるようになります」

「くじらなら大きいわねえ」

「くじら大きいです。子供こどもだっているかぐらいあります」

「そうよ、あたしアラビアンナイトで見たわ」姉あねは細ほそい銀ぎんいろの指輪ゆびわをいじりながらおもしろそうにはなししていました。

(カムパネルラ、僕ぼくもう行いつちまうぞ。僕ぼくなんか鯨くじらだつて見たことないや)

ジヨバンニはまるでたまらないほどいらしながら、それでも堅かたく、唇くちびるを噛かんでこらえて窓まどの外そとを見ていました。その窓まどの外そとには海豚いりかのかたちももう見えなくなつて川は二つにわかれました。そのまつくらな島しまのまん中に高い高いやぐらが一つ組まれて、その上に一人の寛ゆるい服ふくを着きて赤あかい帽子ぼうしをかぶつた男おとこが立たっていました。そして両手りょうてに赤と青の旗はたをもつてそらを見上げて信号しんごうしているのです。

ジヨバンニが見ている間その人はしきりに赤あかい旗はたをふつていましたが、にわかにならぬ赤あか旗はたをおろしてうしろにかくすようにし、青あおい旗はたを高く高くあげてまるでオーケストラの指揮しき

者しやのようにはげしく振りふりました。すると空中にざあつと雨のような音がして、何かまっくらなもの、いくかたまりもいくかたまりも鉄砲丸てつぽうだまのように川の向むこうの方へ飛とんで行くのでした。ジヨバンニは思わず窓まじからからだを半分出して、そつちを見あげました。美しい美うつくしい美しい桔梗ききよういろのがらんとした空の下を、実に何万なんまんという小さな鳥どもが、幾いくく組みも幾組いくくみもめいめいせわしくせわしく鳴いて通つて行くのでした。

「鳥とが飛とんで行くな」ジヨバンニが窓まじの外で言いました。

「どら」カムパネルラもそらを見ました。

そのときあのやぐらの上のゆるい服ふくの男はにわかにかい旗はたをあげて狂気きようきのようにふりうごかしました。するとぴたつと鳥の群むれは通らなくなり、それと同時にぴしやあんというつぶれたような音が川下の方で起おこつて、それからしばらくしいんとしました。と思つたらあの赤帽あかぼうの信号手しんごうしゅがまた青い旗はたをふつて叫さけんでいたのです。

「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥」その声もはつきり聞こえました。

それといつしよにまた幾万いくまんという鳥の群むれがそらをまっすぐにかけたのです。二人ふたりの顔を出しているまん中の窓まじからあの女の子が顔を出して美しい頬ほおをかがやかせながらそらを仰あおぎました。

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそのきれいなこと」女の子はジョバンニにはなしかけましたけれどもジョバンニは生意気な、いやだいたい思いながら、だまって口をむすんでそらを見あげていました。女の子は小さくほつと息をして、だまって席へ戻りました。カムパネルラがきのどくそうに窓から顔を引つ込めて地図を見ていました。

「あの人鳥へ教えてるんでしようか」女の子がそつとカムパネルラにたずねました。

「わたり鳥へ信号してるんです。きつとどこからかのろしがあがるためでしょう」

カムパネルラが少しおぼつかなそうに答えました。そして車の中はしいんとなりました。ジョバンニはもう頭を引つ込めたかったのですけれども明るいとこへ顔を出すのがつらかったので、だまってこらえてそのまま立って口笛を吹いていました。

（どうして僕はこんなになしなのだろう。僕はもつとこころもちをきれいに大きくもたなければいけない。あすこの岸のずうつと向こうにまるでけむりのような小さな青い火が見える。あれはほんとうにしずかだつめたい。僕はあれをよく見てこころもちをしずめるんだ）

ジョバンニは熱くて痛いあたまを両手で押えるようにして、そっちの方を見ました。（ああほんとうにどこまでもどこまでも僕といっしょに行くひとはないだろうか。カムパ

ネルラだってあんな女の子とおもしろそうに談はなしているし僕はほんとうにつらいなあ）
 ジョバンニの眼めはまた泪なみだでいっぱいになり、天の川もまるで遠くへ行いったようにぼんやり白く見えるだけでした。

そのとき汽車はだんだん川からはなれて崖がけの上を通るようになりました。向むこう岸ぎしもまた黒いいろの崖がけが川の岸きしを下流かりゆうに下るにしたがって、だんだん高くなつていくのでした。そしてちらつと大きなとうもろこしの木を見ました。その葉ははぐるぐるに縮れ葉ちぢの下にはもう美しい緑みどりいろの大きな苞ほうが赤い毛を吐はいて真珠しんじゆのような実みもちらつと見えたのでした。それはだんだん数を増ましてきて、もういまは列れつのように崖がけと線路せんろとの間にならび、思わずジョバンニが窓まじから顔を引ひつ込こめて向むこう側がわの窓まじを見ましたときは、美しいその野原のちへいせんの地平線のちへいせんのはてまで、その大きなとうもろこしの木がほとんどいちめんに植うえられて、さやさや風にゆらぎ、その立派りっぱなちぢれた葉はのさきからは、まるでひるの間にいっぱい日光ひかりを吸すった金剛石こんごうせきのように露つゆがいっぱいについて、赤あかや緑みどりやきらきら燃もえて光ひかりついでした。カムパネルラが、

「あれとうもろこしだねえ」とジョバンニに言いいましたけれども、ジョバンニはどうしても氣持きもちちがなおりませんでしたから、ただぶつきらぼうに野原のちへいせんを見たまま、

「そうだろう」と答えました。

そのとき汽車はだんだんしずかになつて、いくつかのシグナルとてんてつ器の灯を過ぎ、小さな停車場にとまりました。

その正面の青じろい時計はかつきり第二時を示し、風もなくなり汽車もうごかず、しずかなしずかな野原のなかにその振り子はカチツカチツと正しく時を刻んでいくのでした。

そしてまつたくその振り子の音のたえまを遠くの遠くの野原のはてから、かすかなかすかな旋律が糸のように流れて来るのでした。

「新世界交響楽だわ」向こうの席の姉がひとりごとのようにこつちを見ながらそつと言いました。

全くもう車の中ではあの黒服の丈高い青年も誰もみんなやさしい夢を見ているのでした。

（こんなしずかないとここで僕はどうしてもつと愉快になれないだろう。どうしてこんなにひとりさびしいのだろう。けれどもカムパネルラなんかあまりひどい、僕といつしよに汽車に乗っていながら、まるであんな女の子とばかり談話しているんだもの。僕はほんと

うにつらい)

ジヨバンニはまた手で顔を半分はんぶんかくすようにして向むここの窓まどのそを見つめていました。

すきとおった硝子ガラスのような笛ふえが鳴って汽車はしずかに動きだし、カムパネルラもさびしそうに星めぐりの口笛くちぶえを吹きました。

「ええ、ええ、もうこの辺へんはひどい高原ですから」

うしろの方だれで誰かとしよりらしい人の、いま眼めがさめたというふうではきはき談はなしている声がしました。

「どうもろこしだつて棒ぼうで二尺も孔あなをあけておいてそこへ播まかないとはえないんです」

「そうですか。川まではよほどありましようかねえ」

「ええ、ええ、河かわまでは二千尺じやくから六千尺じやくあります。もうまるでひどい峡きやうこく谷くになっているんです」

そうそうここはコロラドの高原じゃなかったらうか、ジヨバンニは思わずそう思いました。

あの姉あねは弟あねを自分の胸むねによりかかせて睡ねむらせながら黒い瞳ひとみをうつとりと遠くへ投なげて

何を見るでもなしに考え込んでいたのでしたし、カムパネルラはまださびしそうにひとり口笛を吹き、男の子はまるで絹で包んだ苹果のような顔いろをしてジヨバンニの見る方を見ていたのでした。

突然とうもろこしがなくなつて巨きな黒い野原がいつぱいにひらけました。

新世界交響樂はいよいよはつきり地平線のはてから湧き、そのまっ黒な野原のなかを一人のインデアンが白い鳥の羽根を頭につけ、たくさんの石を腕と胸にかざり、小さな弓に矢をつがえていちもくさんに汽車を追つて来るのでした。

「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。おねえさまごらんなさい」

黒服の青年も眼をさしました。

ジヨバンニもカムパネルラも立ちあがりました。

「走つて来るわ、あら、走つて来るわ。追いかけているんでしょう」

「いいえ、汽車を追つてるんじゃないんですよ。猫をするか踊るかしてるんですよ」

青年はいまどこにいるか忘れたというふうなポケットに手を入れて立ちながら言いました。

まったくインデアンは半分は踊っているようでした。第一かけるにしても足のふみ

ようがもつと経済けいざいもとれ本気にもなれそうでした。にわかにくつきり白いその羽根はねは前
 の方へ倒れるたおようになり、インデアンはびたつと立ちどまって、すばやく弓ゆみを空にひきま
 した。そこから一羽わの鶴つるがふらふらと落ちて来て、また走り出したインディアンの大きくひ
 ろげた両手りょうてに落ちこみました。インデアンはうれしそうに立ってわらいました。そして
 その鶴つるをもつてこつちを見ている影も、もうどんどん小さく遠くなり、電しんばしらの碍が
 子いしがきらつきらつと続いて二つばかり光つて、またとうもろこしの林になってしまいまし
 た。こつち側がわの窓まどを見ますと汽車はほんとうに高い高い崖がけの上を走っていて、その谷そこの底
 には川がやつぱり幅はばひろく明るく流ながれていたのです。

「ええ、もうこの辺へんから下りです。なんせこんどは一ぺんにあの水すいめん面までおりて行くん
 ですから容易よういじやありません。この傾斜けいしゃがあるもんですから汽車は決して向むこうからこ
 つちへは来ないんです。そら、もうだんだん早くなつたでしょう」さっきの老人ろうじんらしい
 声こゑが言いいました。

どんどんどんどん汽車は降りて行きました。崖がけのはじめに鉄道てつどうがかかるときは川が明る
 く下くだにのぞけたのです。ジヨバンニはだんだんころもちが明るくなってきました。汽車
 が小さな小屋こやの前を通つて、その前にしよんぼりひとりの子供こどもが立たつてこつちを見ている

ときなどは思わず、ほう、と叫びました。

どんだんどん自動車は走って行きました。室中のひとたちは半分うしろの方へ倒れるようになりながら腰掛にすっかりしがみついています。ジヨバンニは思わずカムパネルラとわらいました。もうそして天の川は汽車のすぐ横手をいままでよほど激しく流れて来たらしく、ときどきちらちら光ってながれているのでした。うすあかい河原などでこの花があちこち咲いていました。汽車はようやく落ち着いたようにゆっくり走っていました。

向こうとこつちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旗がたっていました。

「あれなんの旗だろうね」ジヨバンニがやつとものを言いました。

「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟がおいてあるねえ」

「ああ」

「橋を架けるとこじやないんでしようか」女の子が言いました。

「ああ、あれ工兵の旗だねえ。架橋演習をしてるんだ。けれど兵隊のかたちが見えないねえ」

その時向こう岸ちかくの少し下流の方で、見えない天の川の水がぎらっと光って、柱

のように高くはねあがり、どおとはげしい音がしました。

「発破はっぱだよ、発破はっぱだよ」カムパネルラはこおどりました。

その柱はしらのようになつた水は見えなくなり、大きな鮭さけや鱒ますがきらつきらつと白く腹はらを光らせて空中にほうり出されてまるい輪わを描えがいてまた水に落ちました。ジョバンニはもうはねあがりたくらい気持ちきもちが軽かるくなつて言いいました。

「空こうの工兵へい大隊だいたいだ。どうだ、鱒ますなんかまるでこんなになつてはねあげられたねえ。僕ぼくこんな愉快ゆかいな旅たびはしたことない。いいねえ」

「あの鱒ますなら近くで見たらこれくらいあるねえ、たくさんさかないるんだな、この水の中に」

「小さなお魚もいるんでしょうか」女の子おんなしが談はなしにつり込まれて言いいました。

「いるんでしょう。大きなのがいるんだから小さいのもいるんでしょう。けれど遠くだから、いま小さいの見えなかつたねえ」ジョバンニはもうすっかり機嫌きげんが直なおつておもしろそうにわらつて女の子おんなしに答えました。

「あれきつと双子ふたごのお星みよさまのお宮みやだよ」男おとこの子こがいきなり窓まどの外そとをさして叫さけびました。右手みぎの低い丘おかの上に小さな水すい晶しょうででもこさえたような二つのお宮みやがならんで立つて

いました。

「双子のお星さまのお宮みやってなんだい」

「あたし前になんべんもお母つかさんから聞いたわ。ちゃんと小さな水すい晶しょうのお宮みやで二つならんでいいるからきつとそうだわ」

「はなしてごらん。双子のお星さまが何をしたつての」

「ぼくも知つてらい。双子のお星さまが野原へ遊あそびにでて、からすと喧嘩けんかしたんだろう」

「そうじゃないわよ。あのね、天の川の岸きしにね、おつかさんお話しなすつたわ、……」

「それから彗ほうきぼし星ほしがギーギーフーギーフーて言いつて来たねえ」

「いやだわ、たあちゃん、そうじゃないわよ。それはべつの方だわ」

「するとあすこにいま笛ふえを吹ふいているんだらうか」

「いま海へ行つてらあ」

「いけないわよ。もう海からあがつていらつしやつたのよ」

「そうそう。ぼく知つてらあ、ぼくおはなししよう」

川の向むかこう岸ぎしがにわかになくなりました。

楊やなぎの木や何かもまつ黒にすかし出され、見えない天の川の波なみも、ときどきちらちら針はりのように赤く光りました。まったく向むこう岸ぎしの野原に大きなまつ赤な火が燃もやされ、その黒いけむりは高く桔ききょう梗よういろのつめたそうな天をも焦こがしそうでした。ルビーよりも赤くすきとおり、リチウムよりもうつくしく酔よったようになって、その火は燃もえているのでした。

「あれはなんの火だろう。あんな赤く光る火は何を燃もやせばできるんだろう」ジヨバンニが言いいました。

「蠍さそりの火だな」カムパネルラがまた地図と首くびつぴきして答えました。

「あら、蠍さそりの火のことならあたし知しってるわ」

「蠍さそりの火ってなんだい」ジヨバンニがききました。

「蠍さそりがやけて死んだのよ。その火がいまでも燃もえてるって、あたし何べんもお父さんから

聴きいたわ」

「蠍さそりって、虫むしだろう」

「ええ、蠍さそりは虫よ。だけどいい虫だわ」

「蠍さそりいい虫じゃないよ。僕ぼく博物館はくぶつかんでアルコールにつけてあるの見た。尾おにこんなかぎが

あつてそれで整さされると死しぬって先生せんせいが言いってたよ」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さんこう言ったのよ。むかしのバルドラの野原に一ぴきの蠼さそりがいて小さな虫やなんか殺ころしてたべて生きていたんですって。するとある日いたちに見つかつて食べられそうになつたんですって。さそりは一生けん命めいにげてにげたけど、とうとういたちに押おさえられそうになつたわ、そのときいきなり前に井戸いどがあつてその中に落ちおてしまつたわ、もうどうしてもあがられないで、さそりはおぼれはじめたのよ。そのときさそりはこう言いつてお祈いのりしたというの。

ああ、わたしはいままで、いくつのもの命いのちをとつたかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生けん命めいにげた。それでもとうとうこんなになつてしまつた。ああなんにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだを、だまつていたちにくれてやらなかつたろう。そしたらいたちも一日生きのびたろうに。どうか神かみさま。私の心をごらんください。こんなにむなしく命いのちをすてず、どうかこの次つぎには、まことのみんなの幸さいわいのために私のからだをおつかいください。って言いつたというの。

そしたらいつか蠼さそりはじぶんのからだだが、まっ赤なうつくしい火になつて燃もえて、よるのやみを照てらしているのを見たつて。いまでも燃もえてるつてお父さんおっしゃつたわ。ほんとうにあの火、それだわ」

「そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちようどさそりの形にらんでいるよ」

ジョバンニはまったくその大きな火の向こうに三つの三角標が、ちようどさそりの腕のように、こつちに五つの三角標がさそりの尾やかぎのようにならんでいるのを見ました。そしてほんとうにそのまっ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。

その火がだんだんうしろの方になるにつれて、みんなはなんとも言えずにぎやかな、さまざまの樂の音や草花のにおいのようなもの、口笛や人々のざわざわ言う声やらを聞きました。それはもうじきちかくに町か何かがあつて、そこにお祭りでもあるというような気がするのです。

「ケンタウル露をふらせ」いきなりいままで睡っていたジョバンニのとなりの男の子が向こうの窓を見ながら叫んでいました。

ああそこにはクリスマスストリイのようにまつ青な唐檜かもみの木がたつて、その中にはたくさんのたくさんの豆電燈がまるで千の蛍でも集まったようについでいました。

「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だねえ」

「ああ、ここはケンタウルの村だよ」カムパネルラがすぐ言いました。

(此の間原稿なし)

「ボール投げなら僕決してはずさない」

男の子が大いばりで言いました。

「もうじきサウザンクロスです。おりるしたくをしてください」青年がみんなに言いました。

「僕、もう少し汽車に乗ってるんだよ」男の子が言いました。

カムパネルラのとりの女の子はそわそわ立ってしたくをはじめましたけれどもやっぱりジヨバンニたちとわかれたくないようなようすでした。

「ここでおりにけあいけないのです」青年はきちつと口を結んで男の子を見おろしながら言いました。

「厭だ。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい」

ジヨバンニがこらえかねて言いました。

「僕たちといっしょに乗って行こう。僕たちどこまでだつて行ける切符持ってるんだ」

「ただどあたしたち、もうここで降りなけあいけないのよ。ここ天上へ行くところなんだから」

女の子がさびしそうに言いました。

「天上へなんか行かなくなつていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりもつといいとこをこさえなけあいけないって僕の先生が言つたよ」

「だつておつ母さんも行つてらつしやるし、それに神さまがおつしやるんだわ」

「そんな神さまうその神さまだい」

「あなたの神さまうその神さまよ」

「そうじゃないよ」

「あなたの神さまつてどんな神さまですか」青年は笑いながら言いました。

「ぼくほんとうはよく知りません。けれどもそんなでなしに、ほんとうのたった一人の神さまです」

「ほんとうの神さまはもちろんたった一人です」

「ああ、そんなでなしに、たったひとりのほんとうの神さまです」

「だからそうじやありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前に、わたくしたちとお会いになることを祈ります」青年はつつましく両手を組みました。

女の子もちようどその通りにしました。みんなほんとうに別れが惜しそうで、その顔い

ろも少し青ざめて見えしました。ジヨバンニはあぶなく声をあげて泣き出そうとしました。

「さあもうしたくはいいんですか。じきサウザンクロスですから」

ああそのときでした。見えない天の川のずうつと川下に青や橙や、もうあらゆる光でちりばめられた十字架が、まるで一本の木というふうにかかっているのか、その上には青じろい雲がまるい環になつて後光のようにかかっているのでした。汽車の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのようにまつすぐに立つてお祈りをはじめました。あつちにもこつちにも子供が瓜に飛びついたりしたときのようなよろこびの声や、なんとも言えない深いつましいためいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架は窓の正面になり、あの苹果の肉のような青じろい環の雲も、ゆるやかにゆるやかに繞っているのが見えしました。

「ハレルヤ、ハレルヤ」明るくたのしくみんなの声はひびき、みんなはそのそのその遠くから、つめたいそのの遠くから、すきとおつたなんとも言えずさわやかなラツパの声をききました。そしてたくさんさんのシグナルや電燈の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかになり、とうとう十字架のちようどま向かいに行つてすつかりとまりました。

「さあ、おりるんですよ」青年は男の子の手をひき姉は互いにえりや肩をなおしてやって

だんだん向こうの出口の方へ歩き出しました。

「じゃさよなら」女の子がふりかえって二人に言いました。

「さよなら」ジヨバンニはまるで泣き出したいのをこらえておこったようにぶつきらぼうに言いました。

女の子はいかにもつらそうに眼を大きくして、も一度こつちをふりかえって、それからあとはもうだまって出て行ってしまいました。汽車の中はもう半分以上も空いてしまいにわかにならんとして、さびしくなり風がいつぱいに吹き込みました。

そして見ているとみんなはつつましく列を組んで、あの十字架の前の天の川のながさにひざまずいていました。そしてその見えない天の川の水をわたって、ひとりのこうごうしい白いきもの人が手をのぼしてこつちへ来るのを二人は見ました。けれどもそのときはもう硝子の呼び子は鳴らされ汽車はうごきだし、と思ううちに銀いろの霧が川下の方から、すうつと流れて来て、もうそつちは何も見えなくなりました。ただたくさんのくるみの木が葉をさんさんと光らしてその霧の中に立ち、黄金の円光をもった電気栗鼠が可愛い顔をその中からちらちらのぞいているだけでした。

そのとき、すうつと霧がはれかかりました。どこかへ行く街道らしく小さな電燈の

「一列いちれつについた通りがありました。それはしばらく線路せんろに沿って進すすんでいました。そして二人ふたりがそのあかしの前を通って行くときは、その小さな豆まめいろの火はちようどあいさつでもするようほかつと消え、二人が過ぎて行くときまた点つくのです。」

ふりかえつて見ると、さつきの十字架じゆうじかはすっかり小さくなつてしまい、ほんとうにもうそのまま胸むねにもつるされそうになり、さつきの女の子や青年たちがその前の白い渚なぎさにまだひざまずいているのか、それともどこか方角ほうかくもわからないその天上へ行ったのか、ぼんやりして見分けられませんでした。

ジヨバンニは、ああ、と深く息いきしました。

「カムパネルラ、また僕たち二人ふたりきりになつたねえ、どこまでもどこまでもいっしょに行こう。僕ぼくはもう、あのさそりのように、ほんとうにみんなの幸さいわいのためならば僕ぼくのからだなんか百ペン灼やいてもかまわない」

「うん。僕ぼくだつてそうだ」カムパネルラの眼めにはきれいな涙なみだがうかんでいました。

「けれどもほんとうのさいわいはいつたいなんだろう」

ジヨバンニが言いいました。

「僕ぼくわからない」カムパネルラがぼんやり言いいました。

「僕たちしつかりやろうねえ」ジヨバンニが胸いっぱい新しい力が湧くように、ふうと息をしながら言いました。

「あ、あすこ 石炭袋だよ。そらの孔だよ」カムパネルラが少しそつちを避けるようにしながら天の川のひととを指さしました。

ジヨバンニはそつちを見て、まるでぎくつとしてしまいました。天の川のひととに大きなまつくらの孔が、どおんとあいているのです。その底がどれほど深いか、その奥に何があるか、いくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えず、ただ眼がしんと痛むのでした。ジヨバンニが言いました。

「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。きつとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たちいっしょに進んで行こう」

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集まつてるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつ、あすこにいるのはぼくのお母さんだよ」

カムパネルラはにわか窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。

ジヨバンニもそつちを見ましたけれども、そこはぼんやり白くけむっているばかり、どうしてもカムパネルラが言ったように思われませんでした。

なんとも言えずさびしい気がして、ぼんやりそつちを見ていましたら、向こうの河岸に二本の電信ばしらが、ちょうど両方から腕を組んだように赤い腕木をつらねて立っていました。

「カムパネルラ、僕たちいつしよに行こうねえ」ジヨバンニがこう言いながらふりかえつて見ましたら、そのいままでカムパネルラのすわっていた席に、もうカムパネルラの形は見え、ただ黒いびろうどばかりひかっています。

ジヨバンニはまるで鉄砲丸のように立ちあがりました。そして誰にも聞こえないように窓の外へからだを乗り出して、力いっぱいはげしく胸をうって叫び、それからもう咽喉いっばい泣きだしました。

もうそこらが一ぺんにまつくらになつたように思いました。そのとき、

「おまえはいつたい何を泣いているの。ちよつとこつちをごらん」いままでたびたび聞こえた、あのやさしいセロのような声が、ジヨバンニのうしろから聞こえました。

ジヨバンニは、はつと思つて涙をはらつてそつちをふり向き、さつきまでカムパネルラのすわっていた席に黒い大きな帽子をかぶつた青白い顔のやせた大人が、やさしくわらつて大きな一冊の本をもっていました。

「おまえのともだちがどこかへ行ったのだろう。あのひとはね、ほんとうにこんや遠くへ行ったのだ。おまえはもうカムパネルラをさがしてもむだだ」

「ああ、どうしてなんですか。ぼくはカムパネルラといっしょにまつすぐに行こうと言っ
たんです」

「ああ、そうだ。みんながそう考える。けれどもいっしょに行けない。そしてみんながカムパネルラだ。おまえがあうどんなひとでも、みんな何べんもおまえといっしょに苹果をたべたり汽車に乗つたりしたのだ。だからやっぱりおまえはさつき考えたように、あらゆるひとのいちばんの幸福をさがし、みんなといっしょに早くそこに行くがいい、そこでばかりおまえはほんとうにカムパネルラといつまでもいっしょに行けるのだ」

「ああぼくはきつとそうします。ぼくはどうしてそれをもとめたらいいでしょう」

「ああわたくしもそれをもとめている。おまえはおまえの切符をしっかりとっておいで。そして一しんに勉強強しなけいけない。おまえは化学をならつたらう、水は酸素と水素からできているということを知っている。いまはたれだつてそれを疑やしない。実験してみるとほんとうにそうなんだから。けれども昔はそれを水銀と塩でできていると言つたり、水銀と硫酸でできていると言つたりいろいろ議論したのだ。みんながめいめい

じぶんの神さまがほんとうの神さまだというだろう、けれどもお互いほかの神さまを信ずる人たちのしたことでも涙がこぼれるだろう。それからぼくたちの心がいいとかわるいとか議論するだろう。そして勝負がつかないだろう。けれども、もしおまえがほんとうに勉強して実験でちゃんとほんとうの考えと、うその考えとを分けてしまえば、その実験の方法さえきまれば、もう信仰も化学と同じになる。けれども、ね、ちよつとこの本をもらん、いいかい、これは地理と歴史の辞典だよ。この本のこの頁はね、紀元前二千二百年の地理と歴史が書いてある。よくもらん、紀元前二千二百年のことでないよ、紀元前二千二百年のころにみんなが考えていた地理と歴史というものが書いてある。

だからこの頁一つが一冊の地歴の本にあたるんだ。いいかい、そしてこの中に書いてあることは紀元前二千二百年ころにはたいい本当だ。さがすと証拠もぞくぞく出てくる。けれどもそれが少しどうかなくとも考えだしてもらん、そら、それは次の頁だよ。紀元前一千年。だいぶ、地理も歴史も変わってるだろう。このときにはこうなのだ。変な顔をしてはいけな。ぼくたちはぼくたちのからだだって考えだって、天の川だって汽車だって歴史だって、ただそう感じているのなんだから、そらもらん、ぼくといっしょ

にすこしこころもちをしずかにしてごらん。いいか」

そのひとは指を一本あげてしずかにそれをおろしました。するといきなりジョバンニは自分というものが、じぶんの考えというものが、汽車やその学者や天の川や、みんないっしょにぼかすと光って、しんとなくなつて、ぼかすともってまたなくなつて、そしてその一つがぼかすともると、あらゆる広い世界ががらんとひらけ、あらゆる歴史がそなわり、すつと消えると、もうがらんとした、ただもうそれつきりになつてしまふのを見ました。だんだんそれが早くなつて、まもなくすつかりもとのとおりになりました。

「さあいいか。だからおまえの実験は、このきれぎれの考えのはじめから終わりましたにわたるようでないといけない。それがむずかしいことなのだ。けれども、もちろんそのときだけのでもいいのだ。ああごらん、あすこにプレシオスが見える。おまえはあのプレシオスの鎖を解かなければならない」

そのときまつくらの地平線の向こうから青じろいのろしが、まるでひるまのようにうちあげられ、汽車の中はすつかり明るくなりました。そしてのろしは高くそらにかかつて光りつづけました。

「ああマジエランの星雲だ。さあもうきつと僕は僕のために、僕のお母さんのために、

カムパネルラのために、みんなのために、ほんとうのほんとうの幸福をさがすぞ」

ジヨバンニは唇を嚙んで、そのマジエランの星雲をのぞんで立ちました。そのいちばん幸福なそのひとのために！

「さあ、切符をしつかり持つておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしにほんとうの世界の火やはげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない。天の川のかなかであたった一つの、ほんとうのその切符を決しておまえはなくしてはいけない」

あのセロのような声でしたと思うとジヨバンニは、あの天の川がもうまるで遠く遠くなつて風が吹き自分はまっすぐに草の丘に立っているのを見、また遠くからあのブルカニロ博士の足おとのしずかに近づいて来るのをききました。

「ありがとう。私はたいへんいい実験をした。私はこんなしずかな場所で遠くから私の考えを人に伝える実験をしたいとさつき考えていた。お前の言った語はみんな私の手帳にとつてある。さあ帰つておやすみ。お前は夢の中で決心したとおりまっすぐに進んで行くがいい。そしてこれからなんでも私のとこへ相談においでなさい」

「僕きつとまっすぐに進みます。きつとほんとうの幸福を求めます」ジヨバンニは力強く言いました。

「ああではさよなら。これはさっきの切符です」

博士は小さく折った緑いろの紙をジヨバンニのポケットに入れました。そしてもうそのかたちは天気輪の柱の向こうに見えなくなっていました。

ジヨバンニはまっすぐに走って丘をおりました。

そしてポケットがたいへん重くカチカチ鳴るのに気がつききました。林の中でとまってそれをしらべてみましたら、あの緑いろのさつき夢の中で見たあやしい天の切符の中に大きな二枚の金貨が包んでありました。

「博士ありがとうございます、おつかさん。すぐ乳をもって行きますよ」

ジヨバンニは叫んでまた走りはじめました。何かいろいろのものが一ぺんにジヨバンニの胸に集まってなんとも言えずかなしいような新しいような気がするのです。

琴の星がずうつと西の方へ移ってそしてまた夢のように足をのぼしていました。

ジヨバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむっていたのです。胸はなんだかおかしく熱り、頬にはつめたい涙がながれていました。

ジヨバンニはばねのようにはね起きました。町はすっかりさつき通りの通りに下でたくさん

の灯あかりを綴つづつてはいましたが、その光はなんだかさつきよりは熱ねつしたというふうでした。

そしてたつたいま夢ゆめであるいた天の川もやっぱりさつきの通りに白くぼんやりかかり、まつ黒な南の地平線ちへいせんの上ではことにけむつたようになって、その右には蠍座さそりざの赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置いちはそんなに変かわつてもいないようでした。

ジヨバンニはいっさんに丘おかを走つて下りました。まだ夕ゆふごはんをたべないで待まっているお母さんのことが胸むねいっぱいに思おもいだされたのです。どんどん黒い松まつの林の中を通つて、それからほの白い牧場ぼくじょうの柵さくをまわつて、さつきの入口から暗くらい牛舎ぎゅうしゃの前へまた来ました。そこには誰だれかがいま帰つたらしく、さつきなかつた一つの車くるまが何かの樽たるを二つ載のつけて置いてありました。

「今晚こんばんは」ジヨバンニは叫さけびました。

「はい」白い太いずぼんをはいた人がすぐ出て来て立ちました。

「なんのご用ですか」

「今日ぎゆうにゆう牛乳ぎゆうにゆうがぼくのところへ来なかつたのですか」

「あ、済すみませんでした」その人はすぐ奥おくへ行つて一本の牛乳瓶ぎゆうにゆうびんをもつて来てジヨバンニに渡わたしながら、また言いいました。

「ほんとうに済みませんでした。今日はひるすぎ、うっかりしてこうしの柵をあけておいたもんですから、大将将さつそく親牛のところへ行つて半分ばかりのんでしまひましてね……」その人はわらいました。

「そうですか。ではいただきます」

「ええ、どうも済みませんでした」

「いいえ」

ジヨバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで包むようにもつて牧場の柵を出ました。

そしてしばらく木のある町を通つて大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になつて、その右手の方、通りのはずれにさつきカムパネルラたちのあかりを流しに行つた川へかかった大きな橋のやぐらが夜のそらにぼんやり立っていました。

ところがその十字になつた町かどや店の前に女たちが七、八人ぐらいつ集まつて橋の方を見ながら何かひそひそ談しているのです。それから橋の上にもいろいろなあかりがいつぱいなのでした。

ジヨバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなつたように思いました。そしていきなり近く

の人たちへ、

「何かあったんですか」と叫ぶようにききました。

「ごどもが水へ落ちたんですよ」一人が言いますと、その人たちは一斉にジョバンニの方を見ました。ジョバンニはまるで夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人でいっぱい、河が見えませんでした。白い服を着た巡査も出ていました。

ジョバンニは橋の袂から飛ぶように下の広い河原へおりました。

その河原の水ぎわに沿ってたくさんのあかりがせわしくのぼったり下ったりしていました。向こう岸の暗いどてにも火が七つ八つうごいていました。そのまん中をもう烏瓜

のあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろにしずかに流れていたのでした。河原のいちばん下流の方へ洲のようになつて出たところに人の集まりがくつきりまっ黒に立っていました。ジョバンニはどんどんそちへ走りました。するとジョバンニはいきなりさつきカムパネルラといっしよだったマルソに会いました。マルソがジョバンニに走り寄って言いました。

「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ」

「どうして、いつ」

「ザネリがね、舟ふねの上から烏からすうりのあかりを水の流ながれる方へ押おしてやろうとしたんだ。そのとき舟ふねがゆれたもんだから水へ落おつこつたろう。するとカムパネルラがすぐ飛とびこんだんだ。そしてザネリを舟ふねの方へ押おしてよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ」

「みんなさがしてるんだろう」

「ああ、すぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見つからないんだ。ザネリはうちへ連つれられてった」

ジョバンニはみんなのいるそつちの方へ行きました。そこに学生たちや町の人たちに囲かこまれて青じろいのがつたあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服ふくを着きてまつすぐに立つて左手に時計とけいを持つてじつと見つめていたのです。

みんなもじつと河かわを見ていました。誰だれも一言ひとことも物ものを言う人もありませんでした。ジョバンニはわくわくわくわく足がふるえました。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行つたり来たりして、黒い川の水はちらちら小さな波なみをたてて流ながれているのが見えるのです。

下流かりゆうの方の川はばいっばい銀河ぎんがが巨おおきく写うつつて、まるで水のないそのままのそらのよ

うに見えました。

ジヨバンニは、そのカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかいないというような気がしてしかたなかつたのです。

けれどもみんなはまだ、どこかの波の間から、

「ぼくずいぶん泳いだぞ」と言いながらカムパネルラが出て来るか、あるいはカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いて立っていて誰かの来るのを待っているかというような気がしてしかたないらしいのでした。けれどもにわかにかムパネルラのお父さんがきっぱり言いました。

「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから」

ジヨバンニは思わずかけよって博士の前に立って、ぼくはカムパネルラの行った方を知っています、ぼくはカムパネルラといっしょに歩いていたので、と言おうとしましたが、もうのどがつまってなんとも言えませんでした。すると博士はジヨバンニがあいさつに來たとも思つたものですか、しばらくしげしげジヨバンニを見ていましたが、

「あなたはジヨバンニさんでしたね。どうも今晚はありがとう」とていねいに言いました。

ジヨバンニは何も言えずにただおじぎをしました。

「あなたのお父さんはもう帰っていますか」博士は堅く時計を握ったまま、またききました。

「いいえ」ジヨバンニはかすかに頭をふりました。

「どうしたのかなあ、ぼくには一昨日たいへん元気な便りがあったんだが。今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。ジヨバンニさん。あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね」

そう言いながら博士はまた、川下の銀河のいっばいにうつった方へじつと眼を送りました。

ジヨバンニはもういろいろなことで胸がいつぱいで、なんにも言えずに博士の前をはなれて、早くお母さんに牛乳を持って行って、お父さんの帰ることを知らせようと思うと、もういちもくさんに河原を街の方へ走りました。

青空文庫情報

底本：「銀河鉄道の夜」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年7月20日改版初版発行

1987（昭和62）年3月30日改版50版

入力：幸野素子

校正：土屋隆

2005年8月18日作成

2010年11月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>